

原作の天樹征丸先生は、実は元講談社社員！ いまだに語り継がれる伝説がたくさんあります。

TSUCHIYA's Comment



## コミック編集

にしむらひろし  
西村浩

現担当

モーニング・イブニング  
編集部(1998年入社)いけだまさゆき  
池田雅行

初代担当

週刊少年マガジン  
編集部(1992年入社)

コミック編集の仕事を見る

**西村 (以下、西) :** 僕は新入社員で週刊少年マガジン編集部配属されたんですが、そのときは樹林さん(※天樹征丸さんの本名)とはほとんど接点がありませんでした。当時の編集部は複数の班に分かれて、基本的に班ごとに作品や作家を担当する体制だったんですが、樹林さんとは違う班だったんです。だから、2020年にイブニング編集部へ異動し、そこで初めて『金田一 37歳の事件簿』を担当することになって驚きました。すごいめぐり合わせというか……。池田さんは、樹林さんが指導社員だったでしょう？

**池田 (以下、池) :** そうです。僕も週刊少年マガジン編集部の配属で樹林班に入り、毎日一緒に過ごしていました。会社近くのロイヤルホストで作家さんと一緒に打ち合わせしたり、ネーム(漫画の設計図のような絵コンテ)を作ったりしてね。**新人はロイヤルホストの領収書の精算が最初の仕事(笑)。**『金田一少年の事件簿』は1992年に新連載としてスタートするわけだけど、「作画はさとうふみやさんしかない！」と当時の編集長も推して、まだ新人だったさとうさんに決まった。今振り返ると、あの時の編集長の勤めすごかったなあ。宣伝は樹林さんが僕に任せてくれて、「真相当てクイズ」の中吊り広告(少年漫画誌では初の試み!)を出すことになったんです。



『金田一少年の事件簿』は「週刊少年マガジン」1992年45号で連載スタート。当時は3週合計で160ページという圧巻のボリュームでも話題を呼んだ。

※連載開始時は、原作者は金成陽三郎、漫画はさとうふみや、担当編集に天樹征丸(樹林伸)、というチームで制作していた。

**西 :** 樹林さんはけっこう若手の意見を聞きがかったし、取り入れていましたよね。

**池 :** それが樹林さんのすごさでもある。使えないアイデアはその理由を的確に説明してくれるし、**誰かのアイデアの中から何か光るものを引っ張りあげたら、そこからの発展力がすごい。**しかももっとすごいのが**途中で積み上げたトリックよりいいアイデアが思い浮かんだら、即座にポツにして書き直すことができる！**自分のアイデアを躊躇なく捨てることができるのは本当にすごい。**そんな原作者は樹林さん以外で見たことがない。**

**西 :** 「イブニング」でも「金田一」シリーズは抜群の人気で、それは主人公の一(はじめ)ちゃんのキャラが愛されているからだろうと思います。名言もいっぱいありますよね。「**謎はすべて解けた！**」とか。樹林さんとさとうふみやさんの30年来のチームプレーもさすがで、樹林さんから送られてきた文字だけの原作は、一話分22ページにおさまらないように見えても、さとうさんが重要な部分は全部入れてページ内におさめてくれる。ほとんど直すことがないし、進行もメチャメチャ優良。だからこそ、30周年プロジェクトでは『金田一 37歳の事件簿』『金田一少年の事件簿30th』を3か月連続刊行することができたんじゃないかと思います。

**池 :** それはやっぱりロイヤルホストで、樹林さんもさとうさんも含めみんな「ああじゃない」「こうじゃない」とネームを作っていた時代があったのも大きいだろうね。

**西 :** 息の合ったお二人だからこそ、こんなに長く続けられたんでしょうね。

『金田一37歳の事件簿』は「イブニング」で連載中(2023年2月28日発売号での「イブニング」休刊に伴い、以降は漫画アプリ「コミックDAYS」に移籍予定)。「単行本の裏表紙に載っている書類や一言フセンは、毎回担当編集がアイデアを出しているんですよ」と西村さんが明かす。原作者・天樹(樹林)さんとの思い出話はまだまだ尽きない。

